神領遺跡群

今から1,500～1,600年前の古墳時代に志布志湾岸や肝属平野部では，横瀬古墳という大型前方後円墳をはじめ，多くの古墳が造られました。神領遺跡群内に存在する神領古墳群もその一つです。特に神領10号墳で発掘された資料からヤマトの勢力と深く結びついている人物が埋葬されていることが分かりました。また，横瀬古墳の築造時期とほぼ同じ時期に造られており，横瀬古墳の被葬者とも関係が深いことが指摘されています。

台地の南東部には城が築城されていました。築城時期は今から約800年前の鎌倉時代と推測されていますが，定かではありません。この城は『龍相城』と呼ばれていました。文明６年（1474年）には肝付町の高山城を本城とする肝付本家を離反した肝付兼光がこの一帯に一時的に城を構え，この時に『大崎城』と名乗りました。龍相城（大崎城）は長い年月の間に城主を変えながら，天正４年（1576年）肝付氏が島津氏の軍門に下り，翌年に現在の大崎小学校周辺に新たに大崎城が築城されるまで，大隅半島支配の重要な拠点として活躍しました。

神領古墳群・地下式横穴墓群

神領遺跡群内には９基の円墳（１～５号，７～９号，12号）と４基の前方後円墳（６号，10・11号，12号）が点在する。ただし，多くは発掘調査がなされていないため，すべての古墳の実態は不明である。平成18～20年に鹿児島大学総合研究博物館によって神領10号墳の発掘調査が行われ，貴重な成果を得た。

また地下式横穴墓という霧島山麓，宮崎平野部，志布志湾岸・肝属平野部の限られた地域にしかない「地下式横穴墓」という古墳時代の独特の墓が，この遺跡群内でも発見されている。

❷神領１～５号墳

宅地奥の竹林内に立地しているため，容易に見ることができない。１～３号墳は直径10m前後，高さ２m程度の規模を測る。

❸神領６号墳

宅地造成で消失した墳長約30mの前方後円墳。昭和43年に発掘調査が行われたが，記録の所在は不明である。埋葬施設は花崗岩製の箱式石棺であった。

日光鏡（写真左）と獣帯鏡（写真右）が出土したとされるが，出土記録は不明である。

❹神領11号墳

古江（大隅）線の建設によって縦半分が失われた前方後円墳。残った半分が法面上部に残っており，1.5～3m程の墳丘の高まりを確認できる。平成21年に鹿児島大学総合研究博物館によって測量調査が行われ，復元した推定の墳長は約33mとされている。

❺神領10号墳

平成18～20年に鹿児島大学総合研究博物館によって発掘調査がされた。周溝が確認され，周溝の範囲から墳長約54mの前方後円墳と推定されている。埋葬施設は溶結凝灰岩をくり抜いて造られた刳抜式石棺で，棺の左右に２箇所ずつ前後に１箇所ずつの縄掛けの突起が施されていた。最大長は277cm，最大幅は128cmを測る。破損した棺の蓋も出土しており，軽石で棺を覆っていたと考えられる。

棺内からヒスイ製勾玉，碧玉製管玉などが出土した。棺外からは鉄剣，甲冑片，鉄製の矢じりなどの武具が出土した。

墳丘西側くびれ部の墳端部の小さなテラスに，小型の須恵器と土師器を方形に配置し，その前面に須恵器器台２セットと台付壺１つが配置された形で出土した。また，そのテラスを囲むように周溝底面に須恵器の甕を中心とした土器が並んで出土した。

以上は祭祀空間に伴う土器群と考えられる。これらの土器群は総計71個体以上あって，須恵器35個体，土師器が36個体以上である。

神領10号墳の埋葬施設の様子
（写真提供：鹿児島大学総合研究博物館）

墳丘西側くびれ部分の祭祀空間
（写真提供　鹿児島大学総合研究博物館）

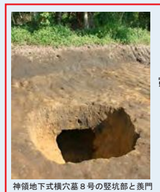
前方部西側で出土した盾持人埴輪
（写真提供　鹿児島大学総合研究博物館）
鹿児島大学総合研究博物館所蔵

前方部西側には盾持人埴輪が出土した。リアルな表情に作られている点が特徴である。

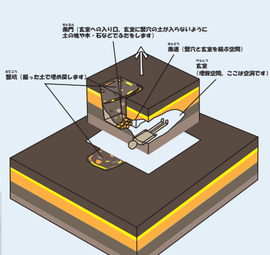
人物を表現した埴輪が現れた初期段階の５世紀前半もので，最先端の情報が大隅地域にもたらされていたことが分かる。大量の初期須恵器の出土を含め，ヤマトの勢力と密接につながっていたと言える資料が多く得られた。

なお，築造時期はほぼ横瀬古墳の築造時期と同じ頃で，横瀬古墳の被葬者に深く関わっていた人物が埋葬されていたと考えられる。

地下式横穴墓（ちかしきよこあな）



神領地下式横穴墓８号の竪坑部と羨門



神領地下式横穴墓１号出土
内向花文鏡と貝釧（貝製の腕輪）

古墳時代に造られる古墳には，上からみた形が円形をした円墳，方形をした方墳，円墳と方墳を組み合わせた形の前方後円墳などがある。これらは土を盛って，そこに埋葬施設を造る構造で。これを「高塚墳」と呼ぶ。

高塚墳は，当時近畿で勢力を拡大していたヤマト王権の王族や豪族の墓の影響を受けたもので，特に本町横瀬にある大型前方後円墳である横瀬古墳や神領古墳群などはヤマト王権と深くつながっていたことが分かっている。

横瀬古墳や神領古墳群が築造された５世紀から志布志湾岸や肝属平野部では，「地下式横穴墓」という高塚墳とは異なる形の墓が造られるようになった。

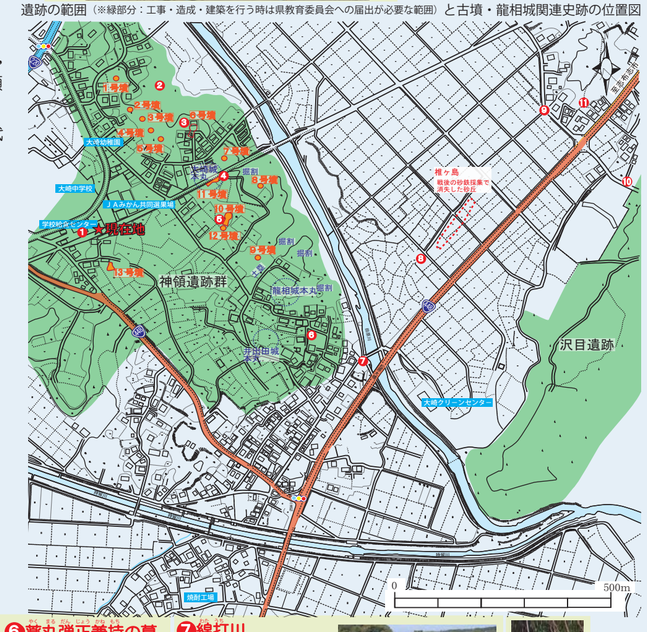
右図のとおり，まず竪坑を掘って，竪坑の下部を今度は，横に掘っていき，玄室を設け，そこに遺体を埋葬する。埋葬した後は，横に掘った入り口を土塊や，木材，石材などで塞ぎ，竪坑を埋める。玄室内の埋葬施設は竪坑から見て横方向に広く掘る場合と，縦方向に広く掘る場合とがあって，前者を「平入り」，後者を「妻入り」と呼ぶ。また，大隅半島では軽石を組み合わせた石棺の中に埋葬されているものもあり，神領遺跡群でも昭和34年に発見されている。刀剣類や具の装飾品が発見されていることから，横瀬古墳などの高塚墳の被葬者に従属する集団の中で，リーダー的立場にあった人々の墓と考えられている。

❶大隅大崎駅跡

昭和10年に串良～大崎～志布志間の古江線（昭和47年に「大隅線」に改称）が開通し，大崎町内にも，菱田駅，大隅大崎駅，三文字駅が置かれた。

昭和62年に国鉄民営化によって全線廃止となり，大隅大崎駅舎跡地は学校給食センターとなっている。

遺跡の範囲（※緑部分：工事・造成・建築を行う時は県教育委員会への届出が必要な範囲）と古墳・龍相城関連史跡の位置図



❻薬丸弾正兼持の墓

父は名将として知られる肝付家重臣 薬丸兼将（湖雲）。子の兼成（巻岐寺）は野太刀の達人で，肝付氏が島津氏の臣下となった後に島津家の家臣として軍功を挙げた。

兼持に関する資料は少ないが討死した時は，20代の若さであったとも言われている。

❼綿打川

田原川下流域を指す名称。『大崎名勝誌』では椎ヶ島の戦いで戦死した兵士の亡骸が川を堰止めたことから，「腸打（わたうち）川」と言うと記されている。

❽猪鹿倉丹後守忠兼の墓

椎ヶ島古戦場跡に建っている武将の墓。弘治２年の戦でこの地で亡くなっている。百引城主。猪鹿倉氏は島津氏家臣伊集院氏の支流である。

❾椎ヶ島大明神

もともと椎ヶ島古戦場の丘にあった。戦死者の霊を鎮めるために建立された。

❿六面地蔵

戦死者の霊を鎮めるために島津義弘が寄進したと伝えられる。

⓫大野出羽守の墓

島津方の武将。蓬原地頭であった。薬丸兼持との一騎打ちで深手を負った後，益丸で自害したと言われている。

龍相城（旧大崎城）跡

井出田城という表記もあるが，『大崎町史』で救仁郷断二氏は，田原川に面した南の突端部を井出田，北の突端部を龍相とし，城の中心が井出田から龍相に移動したと述べている。

●南北朝時代　～楡井氏の支城として～

正平３年（1348年），南朝方（後醍醐天皇方）にあった楡井頼仲，頼重兄弟が兵を挙げる。この時，兄頼仲は志布志の松尾城に，弟の頼重は仮宿の胡摩ヶ崎城に拠点を置き，肝付氏とともに大隅の守りを固めた。胡摩ヶ崎城を中心に西は野卸城（崎園），北は天ヶ城（岡別府），東は天守城（在郷），南は龍相城が支城となって陣を固めた。

正平12年（1357年）畠山直顕の指示により，禰寝氏が胡摩ヶ崎城を攻略し，落城。頼重は戦死した。続いて頼仲も志布志の大慈寺で自害した。

●戦国時代　～肝付兼光と大崎城～

文明元年（1469年※一説には文明13年とも言われている。）に肝付兼光が天守山（現在の天子ヶ丘）を中心とした大崎城を創建した。肝付兼光は肝付第12代当主 兼忠の四男である。三男兼連は，兼忠と長男国兼が不仲であったことに乗じて，国兼を領外へ追放した。兼光は国兼の復帰を申し出たが，兼連に聞き入られず，兼光は肝付本家を離れ，大崎城を創建し，島津第11代当主 島津忠昌の配下となった。

文明16年（1484年）に櫛間（串間市）の伊作久逸が，飫肥（日南市）の新納忠続を攻撃し（伊作久逸の乱），これをきっかけに島津忠昌と久逸のクーデターに乗じた諸豪族を巻き込んだ争乱となる。肝付兼光の跡を継いだ兼固はこの時の戦功を認められ，忠昌から溝辺30町を与えられた。大崎城の肝付一族は溝辺に移る。後の代にこの肝付家は溝辺→加治木→喜入へと移り，幕末には肝付尚五郎（後の小松帯刀）を輩出することとなる。

●戦国時代　～三州争乱と龍相城～

争乱後の領地替えで，飫肥の新納氏は志布志とその周辺（末吉・財部・救仁郷※を与えられ，龍相城も新納氏のものとなる。

櫛間と飫肥を与えられた島津氏（豊州島津氏）と新納氏との抗争が始まり，さらに豊州島津氏を支援する島津忠昌と新納氏を支援する肝付氏の争いも起こる。後に島津本家における島津実久と伊作忠良（伊作久逸の孫。後の島津忠良）・貴久親子との実権争いが加わり，三州争乱となる。島津実久は，日向・大隅の勢力を味方に付けようと櫛間城主 島津忠朝と都城城主 北郷忠相を中心に画策するも，新納忠勝の賛同を得ず，新納氏は島津忠朝，北郷忠相，高山城主 肝付兼続によって攻撃を受けることになった。龍相城も天文７年（1538年）に島津忠朝の甥である忠隅と肝付兼続の奇襲を受け，陥落した。翌年，新納氏は降伏した。新納領は分割され，救仁郷は肝付兼続のものとなった。※現在の有明町蓬原・原田・野神・大崎町

●戦国時代　～椎ヶ島の戦い～

新納氏失脚後，肝付兼続は島津実久方から島津貴久方に付いた。島津忠朝の子忠広は，北郷忠相の協力を得ながら肝付領に侵攻するも，日向の伊東義祐が北から自領の飫肥へと侵攻してきたため，肝付攻略ができず，日向の伊東氏の侵攻と肝付氏の勢力拡大に苦しんだ。結果として豊州島津氏と北郷氏は貴久に降伏した。

肝付兼続の子良兼は伊東義祐の娘と結婚し，一方で兼続は島津貴久の姉阿南と結婚していたため，日向の伊東氏と島津宗家はともに肝付氏と姻戚関係にあった。しかし伊東氏の飫肥，都城への侵攻を受けて，肝付氏は伊東氏と結び，北郷氏と豊州島津と対立する。北郷氏と豊州島津氏を援護する姿勢をとった島津貴久に反旗を翻すこととなった。

天文22年（1553年）に飫肥の島津忠親（北郷忠相の子で，島津忠広の養子となり豊州島津家当主となった）を伊東義祐が攻めると，肝付兼続は忠親の領地であった志布志を攻めた。

その翌年，報復として志布志を守っていた甑武清が龍相城を攻撃し，龍相城を守っていた薬丸兼持はこれを迎え撃った。

弘治２年(1556年)８月17日に島津忠親は大軍を率いて大崎を攻撃してきた。肝付方は椎ヶ島で迎え撃ったが，大軍に抑え込まれ龍相城に退いた。肝付方は城を守り抜いたが，300名以上の犠牲者が出た。龍相城の守将であった薬丸兼持は島津方の武将であった大野出羽守と一騎打ちのうえ討死した。また大野出羽守も深手を負い，益丸の下村で自害した。

●安土桃山時代　～城の終焉～

島津氏に反旗を翻した肝付氏は，一時優勢に進撃をするが，兼続とその長男良兼の死によって，一気に求心力を失い，劣勢となっていった。

天正２年(1574年）に肝付氏は島津氏に降伏し，龍相城は島津氏家臣新納忠氏や鎌田政近らがこの城に入る。天正５年(1577年）に大崎初代地頭として比志島国守が就任し，現在の大崎小学校北側に拠点を移したことにより，龍相城はその長い歴史に幕を閉じた。

大崎町教育委員会